

ジュネーブ出張報告



写真：WHO ハイブリッド会議で発言する中谷センター長と在ジュネーブ日本政府代表部二等書記官の石塚彩さん

2021年11月29日から12月1日にかけて、WHO 特別総会の機会に訪欧し、新型コロナウイルス感染症により途絶えていた WHO 本部幹部をはじめ国際機関の人事担当者等と意見交換を行いました。WHO 人事部長との意見交換では、コロナが常態となり、一時低調であったリクルートメントが回復していること、コロナ禍で離職した職員もいるので、2022年はリクルートが加速するであろうこと、Zoom などバーチャルな方式での面接や筆記試験が容易になり、cost effective なため、応募→筆記試験→面接のステップがデフォルトになるとの情報を得ました。Gavi と COVAX Facility の人事部長からは、幹部は人材会社に依頼して候補を発掘し、よりジュニアなポス

トは一般的な公募方式をとっていること、公募期間は通常3週間であること、Competency としては、problem solving、collaboration、agility、flexibility を重視し、supply chain、financing、vaccine の有効性評価等、伝統的な国際保健の枠外のタレントを官民から求めていること等の話を伺いました。これらを踏まえて、在ジュネーブ日本政府代表部山崎和之特命全権大使、本清耕造次席大使を表敬し、人材の送り込みへの協力をお願いするとともに、担当の工藤歩二等書記官と協議しました。写真は WHO のハイブリッド会議での発言時の模様です。後ろの女性は、在ジュネーブ日本政府代表部に二等書記官として新たに赴任された石塚彩さんです。

国際機関幹部人材養成のためのメンタートレーニング

2月5日(土)と12日(土)の2回にわたり、小野崎耕平一般社団法人サステナヘルス代表理事を講師に迎え、国際機関幹部人材養成のためのメンタートレーニングを実施しました。本トレーニングでは、将来の国際機関幹部候補となり得る人材に対してメンタリングを行う方や、部下からのキャリア相談を受ける機会が多い方等を対象に、人材育成の基本フレームワーク、メンタリングの基本、面談の実際、性格タイプ論によるキャリア開発支援の実際等についてアドバイスを頂きました。また、参加者による質問が多かった採用面接の際の留意点についてもご教示頂きました。トレーニング当日は、週末にも関わらず、日本、米国、スイス、フィリピン、ラオスから約30人の参加者にご参加頂き、それぞれのお立場から示唆に富んだコメントやご質問を頂き、とても充実した内容となりました。参加者からは「メンタリングのみならず人材関連業務に必要な幅広い内容を学ぶことができ、当方にとってまさに時宜・的を得たトレーニング・コースでした」等のコメントを頂いています。本トレーニングがより多くの幹部人材のキャリア構築に繋がることを願っています。

国際保健外交ワークショップ

我が国のグローバルヘルス人材の活躍の場は、海外フィールドや国際機関事務局、さらには専門家として規範設定に携わるだけではありません。政府代表等として国際機関等のガバナンスに参加することも大切であり、ポスト・コロナの体制づくりが論じられている昨今では、国際益と国益とを調和をもって主張できる人材の養成が急務となっています。その為、標記ワークショップが、今年度は2回、厚生労働科学研究費「国際会議で効果的な介入を行うための戦略的・効果的な介入手法の確立に資する研究」によって、グローバルヘルス政策研究センター主催で開催され、当センターも全面的な協力を行いました。

まず第一回は2021年10月30日・31日、昨年度のワークショップ参加者を対象としたフォローアップ・ワークショップとして入念に準備されたケーススタディを用いて、決議案の提案、修正、投票といった一連のプロセスを模擬 WHO 執行理事会の様式で実施しました。次いで、12月18日・19日には、日本・タイ・WHO OB の専門家を招き、ハイブリッド方式で講義と演習を組み合わせたワークショップを実施しました。参加者は、国際機関の意思決定会合 (governing body meeting) に参加した、あるいは参加予定の官民の中堅・若手実務者等30名以上で、将来を担う医学部、公衆衛生大学院の学生等もオブザーバー参加しました。

■ 人材登録のお願い

3月15日現在、721名の方が人材登録・検索システムに登録されており、ご希望に応じた空席情報がマッチング・メールにて届くようになっていきます。人材登録・検索システムの使い方に関する動画も登録ページに掲

載しています。未登録の方は登録されますようお願いいたします。

<https://hrc-gh-system.ncgm.go.jp/>



グローバルヘルス・ロールモデル・シリーズの掲載

国際保健分野でのキャリアを考える際、ロールモデルになりうる人物が身近にいないためキャリアパスを具体的にイメージできないということをよく聞きます。そこで当センターでは世界の様々な地域で、グローバルヘルスの多彩な方面で活躍する日本人の方々にキャリア形成のプロセスをお尋ねし、センターのホームページ上で公開させて頂いています。

第10回は、ビル&メリンダ・ゲイツ財団グローバル・デリバリー部門シニア・アドバイザーの馬淵俊介氏です。

第10回

インタビューー 清水眞理子



**ビル&メリンダ・ゲイツ財団
グローバル・デリバリー部門
シニア・アドバイザー**（インタビュー当時）
馬淵 俊介 [まぶち しゅんすけ]

1977年米国ペンシルバニア州生まれ。2001年東京大学教養学部卒業（文化人類学専攻）、国際協力機構（JICA）入構。2007年ハーバード大学ケネディスクールMPP取得。2007

年～2010年マッキンゼー・アンド・カンパニー日本支社、南アフリカ支社勤務。2011年ジョンズ・ホプキンス大学修士号取得。2011年世界銀行入行。2016年ジョンズ・ホプキンス大学公衆衛生博士号取得。2018年ビル&メリンダ・ゲイツ財団入団、デリバリー部門の戦略担当副ディレクター（2018-2019）、グローバル・デリバリー部門のシニア・アドバイザー（2019-現在）、2020年10月～2021年4月COVID-19対応検証独立パネル事務局。

—大学では文化人類学を専攻、文化相対主義に共感

私は学者の家庭で育ったので、普通に会社に入ってサラリーマンになる、ビジネスをやるというイメージはなく、将来は好きなことを探してチャレンジしようと考えていました。中学・高校時代は野球、大学では文化人類学にのめりこみました。きっかけはパプアニューギニアの部族の儀礼の映像を見たことで、冒険心が駆り立てられました。そこには今までの自分の価値観では計り知れない文化があり、文化に優劣はなく、それぞれの文化、社会の合理性があるという文化相対主義に共感し、文化人類学者を目指して休暇中は世界中を旅してまわりました。振り返るとこの経験が、開発の仕事をする原点になっています。グアテマラで先住民族の家庭にホームステイしたとき、家族の健康状態が医療アクセスがないためによくなかったこと、ネパールの山奥で知り合った青年はすごく優秀なのに低いカーストなのでいい仕事につく見込みが全くないこと、自分はいかに恵まれているかを知り、その立場を活かして途上国の人びとの生活をサポートできる仕事につきたいと思いました。自分で考え自分でプランをつくる一人旅で視野が広がり成長できたと思います。それが人生を自分でどんどん切り拓いていく今のスタイルにつながる最初の経験でした。

—2001年国際協力機構（JICA）入構

JICAに入構、社会開発調査部に配属され、教育や地域開発のプロジェクトに参加し若手でもいきなりプロジェクトをやらせていただけたので、チャレンジは無限にありすぐおもしろかった。

ただ、これは私の力不足でもあるのですが、国内でコンサルタントの方から日本語で多くを学びながら一緒に問題解決をし

ていく段階ではうまくいきましたが、英語力も専門性も足りないの、外に出て現地の保健大臣、世界銀行の専門家と議論すると、途端に議論についていけず、中身の貢献が全くできませんでした。百戦錬磨のコンサルタントに助けをもらう状態で、このままでは開発業界をリードできるような人材にならない、世界を舞台に活躍できないと痛感しました。また開発業界自体がJICAだけではなく、結果に対する執着、インパクトにつなげるための考えが浅く、本当に開発事業で途上国の役に立っているのかという疑問が出てきました。英語力と専門性を身につけたいと思いハーバード・ケネディスクールに留学、JICAには4年半お世話になりました。

—ハーバード・ケネディスクールの学びで次の目標が決まる

エキサイティングな日々で非常に充実していました。学生の国際問題に対する意識が高く、知識が豊富。目線の違い、行動力の違いに驚きました。私は、パブリックセクターのベストプラクティスを学びたいと思っていましたが、パブリックセクターを改革しているのは民間の人が民間の組織改革のノウハウでやっていることが多く、民間セクターの方が、洗練された手法をつかって結果を出している。特に経営コンサルティングから来ている人は、大変効率的にプロジェクトを回していました。民間企業の修羅場で問題解決にたちむかって力を磨く経験をしたと思い、卒業後マッキンゼーに行くことにしました。

—マッキンゼーでは日本支社に1年、南アフリカ支社に2年在籍、グローバルヘルスに関心が広がる

マッキンゼーには、優秀な若手がたくさんいて、研ぎ澄まされた問題解決アプローチ、すばらしいノウハウが蓄積されています。大変刺激を受けましたが、仕事に慣れてくるうちに、将来的に世界を舞台に活躍するには英語でマッキンゼーレベルの問題解決ができるようにならないといけないと思い、海外に出る道を考えました。そのタイミングで、ハーバードで知り合った途上国経験豊かな女性と結婚したので、彼女がUNICEFでの仕事を始める際に同じ勤務地を探し、私はマッキンゼーの南アフリカ支社、彼女も南アフリカのオフィスにアプライして二人で着任しました。

南アフリカは気候もよく自然が美しい、しかし仕事は大変でした。

（続きは https://hrc-gh.ncgm.go.jp/job-global/role_model/ でお読みいただけます。）